

Fate/Apocrypha ～月の
陣営～

弥未耶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Fate／EXTRAシリーズのマスターがApo cryphaに参加！
月より降り立つ7人のマスター

7騎対7騎対7騎の聖杯大戦ここに開幕！

目次

プロローグ	月々	1	
第一話	月からの来訪者達	英霊召喚	10
第二話	再会	29	
第三話	初戦(1)	43	
第四話	初戦(2)	56	
第五話	初戦考察	75	

プロローグ（月）

7つの戦いを勝ち抜き、熾天の王座にて待つ者に勝利し自分は今聖杯「ムーンセル・オートマトン」に接続する。

そこで何を識ろうとも、自分が消える事になるとしてもそれが126人の願いの上に立った者の義務なのだと言波白野は決意する。

聖杯に触れ「願い」を入力する。

「この願レいが正解とは限らないが自分の役目は終わった、後は分解を待つだけである。もう！先輩は無欲過ぎますよー、せつかく凄おもちゃい聖杯を手に入れたんですからもう少し遊びましょう！」

自分しかいないはずの空間に突如として響く声に困惑する。

「えーと、誰？」

「酷い、酷過ぎます！いくら記憶喪失キャラでもワタシを忘れるなんて許されません！あんなにも先輩に尽くして色々してあげたのに」

「尽くした、色々した……間違ってはいない気がするが一部が決定的に違うような気がする、という事ではなくこの声は、

「桜なのか」

「違う、違いますよ先輩。大きく括れば正解ですけどそんなのは認めません。せつかくおもちゃがあるんですから頑張っと思って出して下さい。」

先程も気になったがとうとう聖杯をおもちゃと言いきったよこの子。

「そんな事はどうでもいいんです」

どうでも良くないです、あとモノログに突っ込まないで下さい。

そんなやり取りをしている間に聖杯を操作すると記憶が流れ込んできた、いや思い出したと言うべきか。思い出してみれば仕方ないとはいえ忘れていたのが申し訳ないと思う。

「そんな顔しないで下さい先輩。」

BB……心配してくれ……「いじり甲斐がないですよー」うん。いつものBBです。

「では思い出したところで改めて、お久しぶりです先輩！」

BBが以前と変わらぬ姿を現してそう言う。なら自分も、

「久しぶりBB」

閑話休題。

「さて先輩、早速本題に入りましょう」

姿を現し。今までの流れ全無視で話し始めるBB。

「うん。本題からそれたのは主にBBの「本題に入りましょう先輩」

「あ、はい」

やつと本題だ。BBがわざわざ出てきて何のようなのだろう。

自分に会いに来てくれただけではないだろう。

「ちゃんと会いに来たのも理由の一つですよ。諦めが悪いくせにこういう時はあつさり受け入れる先輩の間抜けな顔を見にきました。」

だからモノローグに答えなくて欲しい。そんなに顔に出るのだろうか？そしてまた本題から外れてます。

「では早速今回の要件を発表します先輩。聖杯戦争をしましょう」

「……………?」

突然の彼女の言葉に目を見張った。目の前の彼女は今何と言った。聖杯戦争をする？自分達が必死になって終わらした戦いをまたやろうと言うのか？

「そんなに怒らないで下さい先輩。何も一から始める訳ではありませんよ。こちらの聖杯を使って別の世界に干渉して参加者を送りこみます。」

そんな事が可能なのか？そもそも何故そんな事を？

BBの真意が分からず首を捻っていると、

「そんな事ができるんです！方法はご都合主義チトです。とつてもわかりやすいですね、先輩」

もう突っ込まないぞ。それに今チートの部分がおかしくなかつただろうか？

「なーにもおかしくありません。それで送り込むのはほぼ決定事項なんですけどメンバー決めと最終確認を先輩にお任せします」

既に事後承諾一歩手前まで来ていたとは……。それにしてもメンバー決めに任せると言われても自分の知り合いは聖杯戦争中の人しかいないのだが。

「もちろん、その中からですよ。ポツチな先輩にそんな人脈は期待してません。ムーンセルの聖杯としての力を駆使すればどんなご都合主義チトも起こせますよ！まあ、その辺りは深く考えないで下さい。」

またでたよ。それと微妙に貶された？

それより選ぶにしてもいったい何人選ぶのかそもそも自分が選んだ人同士が戦わされるなら意地でも選ぶ気はない。

「大丈夫ですよ。今回送り込む人数はクラスの違うサーヴァントを持つ7人です。それを一つの陣営として7騎対7騎によって行われている聖杯大戦にぶち込みます！なので基本は皆さん仲間同士、昨日の敵は何とやらつてやつですね。」

なるほど、確かにそれならよっぽどの事がない限り大丈夫、大丈夫なのか？

「本当に突っ込まないし、モノローグ会話に順応してきましたね。」

B Bが何か言っているがひとまず置いておこう。とりあえず送り込むのは確定事項なようだしとなるとメンバーをどうするかな…

別クラスのサーヴァントを持つ7人か：良く考えるまでも無くほぼ決まってる人が何人かいる気がするが其処は自分に選ばせるのが悪いと言う事で。

セイバーは決まってるな。そもそも彼しかない。少年王とその騎士は此度も最強の一角になるだろう。

アーチャーも決まってる。あのコンビには上手くやって欲しい。

ランサーも決まってる。敵である自分を気にかけてくれた素直じゃない彼女だ。

ライダーは彼だ。自分の友達であり最初の敵、いざという時は頼りになるはず。

アサシンは聖杯戦争中に出来た自分の友人に任せよう。敵ならば恐ろしいが味方なら心強い。

キャスターは悩みどころだが彼女にしよう。危険かも知れないが彼女にはやり直して欲しい。

バーサーカーは彼女だ。少しづつ人間性を理解していったホームクルスの少女。予想通りほとんど決まっていたが選り終えた。さてB Bに伝えよう。

「よし決めた!」

「!?」? 突然声を出さしないで下さい! それに先輩のくせしてBBちゃんに放置プレイなんて生意気ですよ!」

放置プレイとか人間きの悪い事を言わないで欲しい。自分の性癖が疑われる。確かに放置していたがそれは真面目に考えていたからだ。

「それはいいですから、決まったなら教えて下さい。そのメンバーでいきますから。」
わかった。メンバーは……

「それでは始めますよ先輩。」

自分はうなずく事で同意する。

「最終確認ですが本当にメンバーはあれでいいんですか? いや、だいたいは予想通りですけど約一名大丈夫ですかアレ。」

大丈夫!……多分。

「多分って言っちゃってますよ。表、裏両方の記憶を与えるので大丈夫でしょうけど。」
巻き込んでしまう別の世界のマスター達には気の毒だが彼らには頑張つて欲しい。

それに彼らなら良い結末を見つけられる気がする。

希望的観測だが自分は信じている。

そろそろ自分は消える時間だ、随分と長く留まれたがそれも終わりだ。こうして岸波白野の物語は終わりをむかえる。

「なーに勝手に終わろうとしてるんですか先輩？」

……………え？

「先輩は今からBBちゃんと月の裏側旅行ですよー」

……………え？

「名付けて『ドキドキ！BBちゃんに行く月の裏側無限旅行』ですよ先輩！大丈夫ですプランは全てこの最強無敵の小悪魔系後輩BBちゃんにお任せあれですよ」

何だその果てしなく嫌な予感しかない旅行は。

そもそも自分はムーンセルに消去されるはずだが？

「そんなの無視です無視！新ルート・要らないならBBちゃんが貰って行くゼルートです！」

そんなルートありません。

……まあ、いいか。少しでも生きれる可能性があるならそれにすがり付こう。それが自分の生き方だ。命ある限りずっと。

「さあ、とばしますよ先輩！」

BBにしがみつくと同時に電子の海に飛び立つ。

自分の旅が再び始まる。

しかし、自分の物語が語られるのはここまでだ。今回の主人公は彼らなのだから。

世界を超えて7人のマスターが月より降り立つ。

それがどんな結末に繋がるのかは誰にも分からない。

しかし、彼らは一人ではない仲間がいて、何より共に月を歩いたサーヴァントがいる。

サーヴァントそれは伝説に語られし英雄達。

それを信じられたならどんな困難も撃ち碎けるだろう。

未熟な自分とそのサーヴァントのように。

i
n
u
e
d
?

第一話

月からの来訪者達～英霊召喚～

数多の試練の果て月の勝者は決した

虚空の観測者は去り、物語は^{extra}終わりをつげる

次なる聖杯は多くの物語を^{fate}紡ぎし原初の杯

戦いは舞台を変え、外典の世界へ……

第一話 月からの来訪者達～英霊召喚～

レオナルド・ビスタリオ・ハーウェイは自らを呼ぶ声で意識を覚醒させた。

「レオ。目を覚ましたか？」

目の前で自分の名を呼んでいるのが自分の兄であるユリウス・ベルキスク・ハーウェイであると理解する。だが覚醒したばかりの頭でそれはありえなと今の状況を不審に思う。

「……兄さん？何故生きて？ボクも兄さんも聖杯戦争で敗北したはずでは？」

「詳しいことは俺にも分かっていない。一つ言えるのは此処が『S.E. R.A. P.H』つまり月ではなく現実だという事だ」

「それは本当ですか？」

ユリウスの言葉には流石のレオも驚いた。月の聖杯戦争から生きて戻るのはただ一人、勝者だけだからだ。

そこで改めて自分達のいる場所を見回した。

「しかし此処はS.E. R.A. P.H.にあった教会のようですが？それに今気がつきませんがボクら以外にも居たんですね。皆さんはまだ夢の中みたいですけど」

落ちて着いて周りを見る事で自分のいる場所を把握し、次に椅子に座り眠っている見知った顔を見つけた。

「ああ。どうやらオレとレオを含めて七人。聖杯戦争で敗北したはずの参加者が集めら

れているようだ」

「七人ですか……それにこのメンバーは……兄さん、基準は何だと思えますか？」
笑みを浮かべながらユリウスに問いかける。

問いかけてはいるが実際は何となく分かってしている様子であり。確認のようなものだ。
「此処にいる奴らは全員あいつと関わった者達だ。そして、レオが此処にいるというこ
とは勝者はあいつだ。大方、聖杯で何かしたんだろう」

ユリウスも僅かに笑みを浮かべて答える。

「やっぱりそうなりますね。となるともつと詳しい状況が知りたいですね」

「その点は心配無い。全員が目覚めたら説明があるそうだ」

「何故そんな事が分かるですか？」

「オレが起きた時にはもう一人いた。それだけ言うとは出て行ったがな」

「それなら早い所皆さんを起こしますか」

「ああ。だがその前に、起きているだろうダン・ブラックモア」

不意にユリウスが眠っている参加者の一人に声をかける。

「おや、気付かれていますか？流石ですな」

「ふん。世辞はいらん。随分前から起きていたんだろ？」

「ええ。この老骨もまだ捨てたものではないようだ」

2人の間が僅かに殺気立つが、ユリウスを制してレオが問いかける。

「何故そんな事を？」と聞く必要はあまりありませんねダン卿、ボクらの会話から情報を得たかったわけですか？」

「そうですね。なにぶんわしは2回戦で敗北していますので少しでも正確な情報が欲しいわけです」

「なるほど、ボク達が嘘を言う可能性を考えて盗み聞きに徹していたわけですね。月での事を考えてると当然ですが今回は敵同士だとは限りませよ」

「確証がおりかな？」

ダンの問いにレオはどうでしょう、と肩を竦め笑っている。

「なんにせよ先ずは皆さんを起こしましょう」

「そうだな。いつまでもオレ達だけでは話が進まん」

「ですな」

レオの言葉に同意したユリウスとダンは皆を起こしにかかる。

「さて皆さん！目は覚めましたか？」

レオが全員を見回しながら声をかける。

そこには不機嫌な顔をした赤い少女を始めとした月の聖杯戦争参加者達が座っている。

「先ずは挨拶からですね。おはようございまーす!」

レオが大声で挨拶する。これにはレオの横にいるユリウスもなんとも言えない顔になっっている。

当然返事はない。

「皆さんノリが悪いですね。白野さんとは大違いです」

「何でこんな訳わかんない状況であんたと呑気に挨拶しなきゃいけないのよ! さつさと説明して欲しいんですけど!」

我慢の限界がきたのか赤い少女が吠えた。

「挨拶は大切ですよミス遠坂。それにボクにも詳しい事は分かっています」

赤い少女<遠坂凜>の言葉に笑いながら返答するレオ。

そこに別の人物が囁み付く。

「はあ! じゃあ何、状況的には僕らと変わらないってこと? なのに何でお前が仕切ってるんだよ!」

そう声を上げたのはワカ: 特徴てきな髪 of 少年<間桐シンジ>である。

「別に仕切っているつもりはありませんよ。ボクらの今の立場は平等だと考えていま

「す」

「どうだかね」

「ボク達は等しく皆敗者であり、死んだはずの人間ですよ」

「くっ!?」

レオの率直な言葉にシンジが怯む。

「皆さんもよく覚えているはずですが自分達はその月での聖杯戦争に敗北し死にました。中にはボクのように表裏両方で死んだ記憶がある人もいるはずですよ」

此処で今まで黙っていた褐色肌の少女が口を開いた。

アトラス院のホームクルス<ラニ=V=V=V>である。

「レオ会長の言いたい事は理解しました。しかし、現在の私達は意思を持って此処に存在します」

「ですね。しかし、良かったちやんと裏側の記憶もある様ですね。おかげで随分やり易くなりますね。同時に問題もありますが：殺生院キアラ、貴女は今回どういう立ち位置ですか？」

ラニの言葉に答えた後、今まで黙っていた女性<殺生院キアラ>に問いかける。

「どういふと言われましても、私もこの状況を把握しきれしていませんので何とも言えません」

困ったものですねと平然とレオに言葉を返すキアラ。

この返答にはレオも苦笑を浮かべているだけで歯切れが悪い。

「立ち位置も何もないでしょ！そいつは裏側では滅茶苦茶してくれたんだから！」

「ミス遠坂に同意します。彼女が行なったことは人類を滅ぼす程の悪業です。彼が止めなければ間違いなく人類は滅んでいました。そんな相手に確認する事があるのですか？」

凜が声を上げ、それにラニが同意する。この二人の言葉を聞いてもレオを含めみな困り顔である。

「ミス遠坂それにラニ、貴女がた二人は最後まで見ていたも知れませんがボク等は途中で退場しています。そのせいか彼女が起こした事に関しての情報が完璧ではありません」

「どういう事よ？」

凜の疑問にレオに代わりユリウスが答える。

「簡単に言えば途中退場したオレ達にはその女が最後に敵として現れたことは情報として与えられているが細かい事情や目的までは知らないということだ」

「要するに結果だけを情報として与えられた形になります。簡単に言うと、岸波白野がBBを撃破。その後殺生院キアラが敵として出現、岸波白野がこれを撃破という感じで

す。つまり殺生院キアラについては貴女がた2人しか正確な情報を持っていないという事ですな」

二人の説明に一応納得した様子で頷く凜とラニ。

そういう事でしたか、と納得しているキアラ。

「事情は分かっていたわ。でも敵なのに変わりはないでしょう！」

「ちよつと待てよ！さつきからキアラ先……さんが悪者みたいに言ってるけど本当に裏切ったのかよ？遠坂とラニの二人しか情報を持ってないなら嘘の可能性もあるだろ！」

シンジが立ち上がって凜に対し反論する。

「ハア!?何で嘘つく必要があるのよ、大体あんたにもその女が裏切ったっていう情報は与えられてるはずよ」

疑ってくるシンジに対し凜が呆れた様に言い返す。

「くっ……。でも「本当のことですよ」なっ!?キアラさん！」

更に言い返そうとしたシンジの言葉を意外にもキアラが遮った。

「庇つてくださりありがとうございますね、間桐くん。しかし、凜さんとラニさんが言ったことは真実。私は確かにムーンセルを乗っ取り己が欲のため世界を滅ぼそうとしました」

シンジはキアラの言葉に気落ちした様子で再び椅子に座りこむ。

「しかし、今回は少々思うところもありますのであの様な事をするつもりはありません」
続けてキアラが言った言葉に顔上げるシンジ。

レオもその言葉を聞き口を開く。

「ではボクらと敵対する気はないと？」

「はい、もちろんです」

「そうですか……。ではキアラさんの件は一先ず置いておきましょう」

「よろしいのですかな？」

「ええ、今考えても仕方ありません」

「ちよつとレオ！ホントに放っておくつもりなの？」

「ミス遠坂、現状最も優先すべきなのはボクらの状況を理解することです。殺生院キアラは危険かもしれませんが今重要なのはそこではありません」

「そうですね。私も会長に同意します。ミス遠坂、優先事項を考え一度落ち着きましょう」

「ラニまで？……ああもう、分かったわよ！その女の件は後回し！この状況についてさっさと調べましょう」

ラニに諫められ感情的になり過ぎたと恥ずかしくなったのかそれをごまかす様に立ち上がる凛。

だが……

「その必要は無い。説明ならば私が引き受けよう。というよりそれが此度の私に与えられた役目の一つなわけだが」

声と共に教会の入り口が開かれ外から男が入ってきた。

「戻ったか、随分遅かったな？」

唯一男と会話していたユリウスが声をかける。

「いろいろと準備することがあつてな。此処は月ではないからな、必要なものは多い。それに私としては君達の話し合いの時間を設けたつもりであつたが」

ユリウスの言葉に答えながら中に入り前方に歩いてくる。

「自分達の状況も分からないのにまともな話し合いになるわけないじゃない！」

「だろうな。途中から聞かせて貰つていたが中々に面白かつたぞ」

「あんたね！」

「まあまあ、落ち着きましようミス遠坂。やはり貴方でしたか言峰神父」

「レオ・ハーウェイか……月では残念であつたな、君は間違いなく最強のマスターであつた」

その言葉とは逆に表情は愉しそうである。

「そうですね。しかし、それは既に終わったことですか。それにあの敗北はボクに必

要なものでした。今は貴方の話です。NPCである貴方がいる以上何らかの役割があるはずですね？」

レオの問いに他のもの達も言峰神父に目を向ける。

「当然だな、NPCには決められた役割ロールがある。此度の私の役目は主に君達への説明だ。早速説明に入るが良いかな？」

言峰神父が全員に目を向けると皆無言で答える。

レオも椅子に座り話を聞く姿勢にはいる。

ユリウスとダンは警戒のためか立つたままである。

「では説明に入ろう。察している者もいるだろうが此処は地上だ、正確に言えば並行世界の地上だがな。……質問は後だ先ずは最後まで聞く事だ。次にこの場所だがこの教会はおまえ達の拠点として用意された場所だ。生活するのに問題は無い。………」

言峰の説明は続く、この教会がいかに素晴らしい住居になっているかを。

凜やシンジは今にも怒鳴り始めそうである。

レオは何故か楽しそうである。

ラニは分析でもしているのか真面目に話を聞いている。

ユリウスとダンは呆れ気味である。

キアラは微笑みを崩さず聞いている。

「……となつてゐる。設備は各自自由に使つて構わない。……最後まで口を挟んでこないとは少々期待外れだな」

この言葉に凜がとうとうキレた。

「この似非神父、表に出なさい！ぶつ飛ばしてあげるわ！」

「ミス遠坂、そこで反応したら敗北だと考えます」

怒鳴る凜に対し冷静に言葉をかけるラニの声がその場に良く響いた。

「さて本題だ。君達が此処に送られたのには当然理由がある」

やつとのこととで説明が始まった。

「先程からその理由が知りたくて神父の話しを聞いているのですが……」

言峰に言葉を返すレオも流石に精神的に疲れ気味だ。

「これから先のためを思つての私からの配慮だったのだがね。まあ良い、君達が此処にいる理由は当然『聖杯戦争』だ」

『聖杯戦争』という言葉を聞いた瞬間に緩んでいた空気が張り詰めた。

「予想はしていましたがやはりそうでしたか」

「この顔ぶれでそうじゃなかったら驚きよ」

「そうですね。そうでもなければ私達が生きて此処にいる理由がありません」

自らの状況を素早く受け入れた上で発言したのはレオ、凜、ラニの3人である。

他の者も言葉には出さないがそれぞれ受け入れている。そんな中一人だけ反対の声をあげた。

「な、何簡単に納得してるんだよ!? 聖杯戦争だぞ、またあんなのに参加しないとイケないなんて僕はごめんだね!」

「シンジ、私達に拒否権があると思ってるの?」

シンジに言葉をかけながら言峰の方に視線を向ける。

それに答えるように言峰が口を開く。

「遠坂凜の言う通りだ。お前達に拒否権はない。なにせ月で敗北しているからな、参加しないのであれば今度こそ死ぬだけだな。それでも参加しないと言うのであれば止めはせんよ」

「何だよそれ……」

「それで神父まだ説明はありますよね?」

気を落とすシンジをスルーしてレオは言峰に説明を続けるように促す。

「当然だ。まずこの場所は西暦2000年のルーマニアだ。今この地では聖杯を巡り赤

と黒の二つの陣営に別れ戦いが始まろうとしている。お前達には第3陣営としてのこの戦いに参加してもらう」

言峰の説明は続きこの世界は未だに魔術師メイガスが主流であり魔術師ウイザードが存在しない事、それに伴い自分達にも元の実力に見合った魔術回路が与えられていることなど彼らにとつて驚くことばかりである。

「わしのような年寄りにはついていけませんな」

「ご冗談をダン卿。貴方ほどの人なら必要な事はすぐにでも理解するでしょう」

「買いかぶりですよ。わしは戦うことしかできない軍人にすぎない」

「ボクらがこれから参加するのはまさに戦いです」

「そうでしたな」

2人の冗談混じりの会話の間に他の者達も自分なりある程度状況を整理し落ち着いていた。

それを見計らって言峰が再び口を開く。

「各人自らの状況は理解したようだな、流星は月の聖杯戦争に参加したマスター達、理解がはやくてこちらにも助かるというものだ。それでは改めてこの世界での聖杯戦争、いや聖杯大戦に参加するか否かを問おう」

「ボクは当然参加します。せっかくのチャンスですから無駄にするつもりはありません

ん」

「レオが参加するならオレも参加する」

「わしも参加させて貰おう。月での敗北に後悔はないがああ、あの戦いで学んだこともあったのでな」

「私も当然参加よ。遠坂たるもの常な気高く優雅たれよ。目の前の戦いから逃げたりしないわ」

「私も参加します。アトラス院のホムンクルスとしてこの世界の魔術にも興味があります」

「お役に立つかは分かりませが私も参加しましょう。数合わせ程度にお考えくださいね」

次々に6人が参加を決めた中、間桐シンジは未だ俯いていた。

「あんたはいつまでそうやってるつもり？」

「うるさいな、僕がどうしたって勝手だろ。おい、神父！」

「何だね、間桐シンジ」

「何で僕を選んだだよ？一回戦で負けるようなマスターだぞ」

「その質問には答えれんな、何せ参加するマスターを選んだのは岸波白野だからな」

「この場にいる全員がそれを予想していたので驚く者はいなかった。」

シンジ自身も分かっていた。彼は決してバカではない。考えれば答えにたどり着く能力を備えている。それでもあえて聞いたのだ。

「やっぱね。分かってたさ、けど岸波の分際で僕を『選ぶ』とか生意気だよホント……」
「それだけあんたのことを認めてたってことでしょ。魔術師ウィザードとしても対戦相手としても、そして何より友達として」

「そんなこと分かってたよ。アイツはいつだって僕をちゃんと見てくれてたさ。ならやるしかないよな、自分がどれだけ優秀な友達を持ったか改めてわからせてやるさ」

「全員、参加を決めたようだな。この時を持って君達は聖杯に認められた」

言峰の言葉が終わると同時にその場にいる7人は手の痛みに顔をしかめた。その手に刻まれたのは令呪。聖杯戦争への参加資格である。

皆思っているにそれを眺めている。

「無事令呪を得たようだ。ではついて来い、地下にサーヴァント召喚のための場所を用意してある」

「この教会地下まであるの!?? 本当にやりたい放題ね!」

言峰の後に続き地下に降りて来た所で全員に一枚の紙が渡された。

「これは何です？」

「地上の聖杯戦争ではサーヴァントの召喚に詠唱が必要となる。直ぐに覚えたまえ」

「如何にも魔術師って感じね」

「たく、面倒だな。まあこれぐらいの長さなら覚えるのは余裕だけどね」

全員が紙に目を通し始める。

そして数分後。

「さて全員覚えたかね？」

「余裕だつて言つたらろ」

「問題ありません。皆さんも大丈夫ですね？」

レオからの問いに全員が頷いた。

「では始めよう」

七人のマスターが横一列に並び同時に詠唱を唱え出す。

『素に銀と鉄

礎に石と契約の大公

手向ける証は『月』

降り立つ風には壁を

四方の門は閉じ　王冠より出で

王国に至る三叉路は循環せよ

閉じよ　閉じよ　閉じよ　閉じよ　閉じよ

繰り返すつどに五度　ただ満たされる刻を破却する

ー告げる

汝の身は我が下に　我が命運は汝の剣に

聖杯の寄るべに従いこの意この理に従うならば応えよ

誓いを此処に

我は常世総ての善と成る者

我は常世総ての悪を敷く者

汝三大の言霊を纏う七天　抑止の輪より来たれ　天秤の守り手よ!」

七騎のサーヴァントの同時召喚により膨大な魔力が吹き荒れ視界を覆い尽くす。

「来たようだな」

一際大きな魔力の奔流が収まると共にマスター達の目に入ったのは七騎のサーヴァント。

『召喚に応じ参上しました。我らは月のサーヴァント、我らの運命は貴方方と共にあり、我らの剣は貴方方の剣である。』

「……!!」

月より来たマスターにより七騎のサーヴァントが召喚された。

黒と赤による聖杯大戦に新たに第三陣営・月の陣営が参戦する事が決定した瞬間である。

第二話 再会

セイバー、ランサー、アーチャー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカーすべてのサーヴァントが無事召喚された中真つ先に動き出したのはセイバーであった。

セイバーは己がマスターであるレオの前まで歩き片膝をついた。

「レオ、いえレオナルド・B・ハーウェイ。敗北した身ではありませんが今一度貴方に我が剣を捧げます。太陽の騎士として此度こそ貴方に完全なる勝利を」

「よく戻りました、ガウェイン。貴方の再びの忠誠、王として受け取りました。此度もまたボクの剣としてその力存分に振るってください」

「はい、我が王よ」

セイバー・ガウェインに続き他のサーヴァント達も自らのマスターの元へ歩を進める。

遠坂凛のサーヴァントはランサー・クーフーリン。

「よう嬢ちゃん！また組めるとは思わなかったぜ」

「そうね。私も全く予想外よ。けど参加するからには勝つわよランサー」

「いいねえ、そうこなくちや。今回も存分に戦えそうだ。にしてもいい主人といい戦い、

珍しく運にめぐまれてるもんだ」

凜とランサーは相変わらずの相性の良さである。

ダン・ブラックモアのサーヴァントはアーチャー・ロビンフット。

「来たかアーチャー」

「こちとらサーヴァントなわけですからね。そりやお呼びとあらば来ますさ」

「此度もよろしく頼むぞ」

「一度負けたサーヴァントをそんなに信頼していいのか旦那」

アーチャーは茶化すようにダンに言葉を返す。

「あの時はわしの意地に付き合わせお前自身の戦いができなかった。

あの戦いに対し言い訳も後悔もせん。だがお前の全力の戦いではなかった」

「……ハア。そこまで言われたら俺も少しは気合い入れてやるしかなくなるってわけだ。まあ精々最後まで足掻きますよっと」

相変わらずお堅いマスターなこった、と呟きながらもその顔はどこか嬉しそうにも見えた。

間桐シンジのサーヴァントはライダー・フランシス・ドレイク。

「よう、シンジ久しぶりじゃないか！」

「やっと戻つて来たのかよライダー！お前はホント肝心な時に居ないんだからこつちは大変だつたんだぞ！」

「なんだいシンジ、アタシが居なくて寂しかったのかい？」

「ハア！そんなわけ無いだろ！お前こそ僕がいないと。……つて頭を撫でるな！」

「素直じゃないねえー」

シンジの頭を乱暴に撫でるライダー、その二人の姿は我儘な弟と面倒をみる姉の様に見えなくもない。

ユリウスのサーヴァントはアサシン・李書文。

「またお主と組むことになろうとはなユリウス」

「不満かアサシン？」

「いやお主に不満はない。儂は強者と武を競い合えればそれでよい。」

お主は敵を殺せればよい。そうであらう？」

「そうだな。今回は月とは違いいざとなれば撤退も可能だ、ある程度好きにしろ」

「呵々、随分融通がきくではないかマスター。ならば儂も全力でやらせて貰おう」

両者の関係は悪くないむしろ相手を殺すという一点においてはかなり兇悪な組み合わせである。

ラニのサーヴァントはバーサーカー・呂布奉先。

「バーサーカー」

「……」

ラニの呼びかけに対し唖るバーサーカー。

「私には貴方の言葉は伝わらない。しかし、前回の様に無関心でもいたくはありません。

なのでせめて私は貴方に言葉をかけます。よろしく願いますバーサーカー、共に勝

利をおさめましょう」

「……!!」

ラニの言葉に応える様に大きな咆哮を上げバーサーカーは霊体化した。戦う相手が

ないからなのか魔力消費の多いバーサーカーゆえにラニの体を気遣つてなのかは

バーサーカーにしかわからない。

殺生院キアラのサーヴァントはキヤスター・ハンス・クリスチャン・アンデルセン。

「また会いましたね、アンデルセン」

「……」

「その露骨に嫌そうな顔は何ですか？」

「嫌だからに決まっているだろう、やつと面倒な仕事が終わつたと思つたらこれだ。同

ジマスターとの契約、それもよりによってお前とはな。まさに悪夢だ」

「まあ、相変わらず口が悪いですね」

「当然だ、人というのは早々変わらん。だがお前のその顔は何だ？」

「顔？何かついていきますか？」

「違う。自らの欲と快楽にしか興味のない様な女が何を悩んでいるような顔している？
よもや月の裏側での敗北で改心するような謙虚な女ではあるまい」

「あのような負け方をすれば少しは考えることもありますよ」

「ハッ、今になって悩める少女気取りか？歳を考えろ。平凡な少女の話の方がまだネタになるかもしれないがお前では笑いのネタにもならん」

「……アンデルセン。やはり貴方とは一度しっかり話をした方がいいですね」

「お断りだ。まあ、精々悩んで見せろキアラ。何かの拍子にネタも転がるかもしれない」

アンデルセンの毒舌は変わらない。しかし、サーヴァントとしてあらゆる面で最低レベルなこの男が決して裏切らず地獄の底まで付いて来てくれることをキアラは知っている。

全員がサーヴァントとの再会をみたところで言峰が口を開く。

「さて再会の挨拶は済んだかね。ならば今日はもう休んだらどうかね？月とは違いサーヴァントの召喚には魔力を使う、そろそろ疲れが出る頃だ」

「確かにそうね。言われてみれば体が怠いわ」

「そうですね。本格的に戦いに参戦すれば落ち着いて休めることも少なくなりそうですね」

「休める時に休んでおく戦場では大切なことですね」

「それよりさ、此処地上なんだろ？食事とかどうなってるわけ？僕お腹減ったんだけど」

「誰か料理作れる人はいますか？」

「レオ！食事なら私にお任せをこのガウエイン全力でマッシュユさせていただきます」

「貴方の気持ちは嬉しいですが食事に関しては黙っていてください」

「ではオレが「兄さんも無しです」……」

名乗り出た二人を即座に切り捨ててレオ。

「ラニはどうなの？」

「残念ながら料理は専門外です。ミス遠坂の方は？」

「こちらら物心ついた時から電脳戦よ。料理なんてする暇無いわよ」

「そんなんだから男の一人も寄ってこないんだぜ嬢ちゃん」

「うるさいわよランサー」

「旦那はどうなんだ……その一人暮らしだろ？」

「気を使わずとも良いぞアーチャー。だが家の事はメイドに任せてある」
「意外だな旦那」

「女王陛下に言われてな、家を開けることも多かつたのでな」

「話がずれていますよ。一応聞きますがキアラさんはどうでしょう?」

「この女に料理ができると思うか?無理に決まっているだろ。こいつにとつて料理は自分の為に作るものでも誰かの為に作るものでも無い、誰かに捧げられたものにすぎん」

「何故貴方が答えるのですかアンデルセン。流星に私もそこまでは思っていないですよ」

「では作れるのかキアラ?」

「……………」

アンデルセンの言葉にキアラは無言のまま目をそらす。

「全滅ですか。困りましたね」

打つ手無しになったところで言峰の笑い声がその場の全員に届いた。

「いや失礼。お前達の会話は中々に面白くてな。さて食事の心配ならいらんぞこちらで用意しよう」

「神父の他にもNPCが来ているんですか?」

「いや、此処に送られたNPCは私だけだ」

「それでは誰が食事を?」

「もちろん私だが」

言峰の言葉にその場の空気が凍りついた。

「冗談よね？」

「冗談では無いぞ遠坂凜。説明の時に私の役割を伝えたはずだが」

「私達への説明が貴方の役割だと記憶してはいますか？」

「そうだな。しかしこう言ったはずだ主な役割は君達への説明だと」

「要は別の役割もあるという事か？」

「そうだ。そしてそれこそがお前達マスターの世話係だ」

凍りついた空気が絶望に包まれた。

「何で世話係まであんたの役割なのよ！普通そこは桜とかでしょ！」

「私とて好き好んでやっているわけでは無いのでな。あくまで与えられた役割をこな

しているにすぎない。文句があるなら直接言いたまえ」

そう言うと言峰は懐からリモコンを取り出し操作する。

すると言峰の背後にスクリーンが降りてくる。

映し出されたのは一部の者達によく知る桜の模様と now hecking の文字。

そして流れ出す音楽。

【BBチャンネル!!?】

そうして聞こえてきたのはハイテンションな声。疲れているところにコレである。BBを知っている裏側事件の当事者達と一部サーヴァントはうんざりしている。

「あれー？皆さん表情が死んでますよー。可愛い可愛いグレートデビルなBBちゃんの登場なんですからもっと盛り上がってくださいよー」

「神父、文句は無いのでその映像を切ってもらえませんか」

「酷い、酷すぎます！しかし、残念でしたー。一度つけるとコントロールは全てワタシの思うままなのです」

「ガウエイン、スクリーンを切り捨てなさい」

「御意」

「ちよつとバカ、待ちなさい！」

「ハハハ。冗談ですよミス遠坂。ストップですガウエイン」

レオは笑いながらガウエインに剣をひかせた。

「目が笑って無いわよアンタ」

「…それで何か用ですか？ワタシ結構忙しいんですけど。手短に済ませて貰えます」

「そうそれよ！BB、何で私達の世話係がああ神父なのよ！桜はどうしたの？」

「そんなことですか。だってそつちの方が面しろ、じゃなくて危ないじゃないですかー」

「今普通に面白って言いかけたわよね」

「危ないのも本当ですよ。其処は裏側の校舎と違って襲われる可能性だつてあるんですから。基本的にノロマなオリジナルなんかには任せられません」

「理にかなつてるのが腹立つわね」

「そういうわけで交代とかはありえませんが！もうきりますよー」

言いたい事だけ言うと通信を切ろうとするBB。

「少しよろしいですか？」

「何ですかラニさん？そろそろ戻らないと」BB何してるの？「先輩!?何でもありません！すぐ戻りますから待つて下さい」

突如聞こえてきた自分達の良く知る声にその場の全員が驚いた。

「ちよつと今の声岸波くん？」

「ハクノさんが其処にいるんですか？」

「ハア！岸波のやつ何でお前と一緒にいるわけ？」

「今の声もしかして？BB入るよー？」

「乙女の部屋に勝手に入るなんて駄目ですよ先輩」

「でも今皆の声が…」

「あんな女は放つておきましょうハクノ」

「お母様ばかりずるいんです。私にもかまつてほしいです」

新たにスクリーンの向こうから聞こえてくる声は月の裏側にいた二人のエゴ達の声だ。

「ワタシが目を離してるからって好き勝手しない…聞いてないし。」

ではマスターの方々ワタシは見ての通り忙しいのでBBチャンネル終了です」

「待ちなさい！岸波くんを出しなさいよ」

BBは一方向的に通信を切った。

「……」

「…流石はハクノさん。ボクらの予想の遥か上をいく方々と一緒に居るみたいですね」

「わしは見覚えがないのだが彼は大丈夫かね？」

「あの様子だと大丈夫だろう。それにあいつのことだ、どんな状況でもしぶとく生き残

るだろう」

「そうね。今は自分達の事だけ考えましょう」

「それでは私は休ませてもらいましょうか。行きますよアンデルセン。それでは皆さん

失礼します」

「それではボクらも今日は休みましょう。神父、少し心配ですが明日の朝食を頼みます」

「承った。メニューは麻婆「それ以外でお願いします」…仕方あるまい。時間は遅めだか

10時には用意しよう。」

「じゃあ、僕も部屋に行かせてもらおうよ。行くぞライダー」

「シンジは先に行つてな。アタシはこのランサーの兄ちゃんとか杯か飲んでから行くよ」

「いきなり酒かよ！ボクは先に寝るよ」

「ランサー貴方ね…」

「いいじゃねえか、嬢ちゃん。今回は味方なんだ親睦を深めるには酒が一番なんだよ。よお！其処のアーチャーとアサシンもどうだい？」

ランサーが部屋に行こうとする二組に声をかける。

「英雄様に囲まれてたんじゃ酒の味も分かんなくなるつてもんですわ」

「アーチャー、自分を卑下するな。お前もまた英雄である事をわしは知っておる」

「買い被りすぎつすよ旦那。まあ、戦闘スタイルとか知つといて損はないですからね、いつて来ますよつと」

「わしは先に休んでおく」

ダンと別れランサー達の前に向かうアーチャー。

「酒盛りか。ユリウス、今宵は仕事も無かろう。どうせ明日からはアサシンとして仕事であろう？今日ぐらいは羽目を外しても構わんか？」

「……わかつた。好きにしろアサシン」

「呵々、お主本当に丸くなったの。……そう睨むでない。マスターの気が変わらぬ内に行くとするかの」

笑いながらユリウスの元を離れるアサシン。ユリウスも僅かにレオの方に目を向けた後自室に向かい始めた。

「ガウエイン、貴方も参加して来てはどうですか？」

「いえ、私はレオの側に控えていますので」

「今日のところはもう寝るだけです。ボクも流石に疲れましたから。それに味方との交流は大切です。戦場で齟齬が起きても困りますから」

「……わかりました。レオがそう言うのであれば。では良い眠りを我が王よ」

「ええ、ありがとうガウエイン」

レオに説得される形でガウエインも彼らの輪に加わる。

ランサーを送り出した凜はまだのこっているラニにの元に向かう。

「ラニ、貴女も今日はもう休むの？」

「そのつもりです。その前に少し神父に聞きたいことが」

「何かね、ラニⅡVIIII」

「この世界の魔術についてのデータなどは無いのですか？」

「それならば各マスターの部屋に置いてある。勉強熱心なことだな」

「わかりました。それでは私も部屋に行きます。ミス遠坂ももうお休みですか？」

「今日のところはね。初日から無理しても仕方ないし。貴女もすっかり休みなさいよ」

「問題ありません。体調管理は完璧です」

「そういうところが心配なんだけど。まあいいわ。それじゃあ、お休み」

「はい。お休みなさい」

こうして月のマスター達の初日は終わる。

開戦の時はもうすぐ其処まできている。

第三話 初戦（1）

月より降りて来て一夜経った次の朝、マスター達は一階にある食堂で朝食を取っていた。

「驚いたわ。かなり心配したけどちゃんとした食事がでてくるなんて」

「ですね。流石はムーンセルのNPCといったところですか」

「これくらいはしてくれないと僕の口には合わないね」

各自食事をとりながら感想を述べているが、もつとも多いのは安心の言葉である。

「ところでこの食材は何処から調達したのですか？」

全員の食事を出し終えた厨房から出てきた言峰にラニが問いかける。

「昨日、お前達が眠っている間に街でだが」

「……大丈夫よね？何か凄く不安なだけけど」

「何を心配しているのかは知らんが全く問題は無い」

凜の心配をよそに皿を持って席に着く言峰。

「貴方も食事をとるのですかな？」

「誰も食べてくれんからな、NPCである私に食事は必要ないが趣味のようなものだ」

席に着いた言峰の皿を見たダンは思わず顔を引きつらせた。

目に入ったのは煮え滾る赤い麻婆豆腐。

「…それは何ですか？」

「見ての通り麻婆豆腐だが」

ダンの質問に当然だろうといった様子で言葉を返す言峰。

もちろんダンにもそれぐらいは分かる。英国の人間とはいえ中華料理は知っている。しかし目の前にあるソレは自分の知る物とは違う。

「ムーンセルのデータバンクで三重のロックをかけられていたこの、辛いようで辛いくない。むしろ脳が辛かった事を認識してくれないラー油の作り方を手に入れてきたというのに誰も食べてくれんなのでな自分で食べているわけだ」

「誰が食べるもんですか！」

「ソレを食べるならガウエインのマッシュや兄さんのカレーの方がまだマシですね」

「あらあら、朝から賑やかですね」

月の陣営は思いのほか平和な朝を迎えていた。

「レオ。少しいいかしら？」

「何でしょうミス遠坂」

「私とラニで使い魔を飛ばしておいたから定期的に報告するわ。動きがあれば呼ぶから

その時は地下に来てくれる」

「流石ですね。もうこの時代の魔術を使える様になりましたか」

「お世辞はいらないわ。それに似ているものもあるし、貴方だつてやればすぐにできるでしょ」

「ミス遠坂とラニの能力の高さは評価していますよ。それで何故地下に？」

「あそこにあるスクリーンよ。あれつて魔術的に繋げやすいのよね」

「なるほど、わかりました。では何かあればよろしくお願いします」

エクストラクラス・ルーラー。聖杯戦争に問題があると判断されたさいに召喚されるマスターを持たぬサーヴァント。

今回の聖杯大戦においてルーラーに選ばれた救国の聖女ジャンヌ・ダルクは急ぎルーミアのトリファスに向かっていた。

(一般人に憑依しての召喚というだけでも異常だというのに…)

ジャンヌはフランスに住むレティシアという少女に憑依する形で召喚された。その影響もあり霊体化が出来ないため焦りながらも現代の交通手段を使い移動している。

憑依召喚にも驚いたがそれだけならばそれが今回自分が呼ばれた原因の一つであるとまだ納得できる。

しかし、それを上回る異常イレギュラーが起きたからこそジャンヌは焦りを覚えている。

(召喚されてから新たに十四画の令呪が追加されるなんて異常すぎます。一刻も早く事態の把握に努めねばなりません)

現在ジャンヌの背中には四十二画もの令呪が刻まれている。

元々与えられた令呪は赤と黒の二つの陣営のサーヴァント十四騎にたいする二十八画。つまり新たに七騎分の令呪が与えられたことになる。すなわちこの聖杯大戦に新たに一つの陣営が参戦し聖杯がそれを認めたという事だ。乗せて貰った車に揺られながら思考を巡らせていたジャンヌだが不意にルーラーの持つ探知能力に反応があった。(これはサーヴァント^{!!}?この位置からして…狙いは私?)

ルーミアニアに入ってからからの監視には気付いていたがまさかサーヴァントを差し向けてくるのは予想外だった。

ジャンヌは車の運転手に礼を言った後、装備を展開しながらサーヴァントの気配がする方に単身で赴いた。

「ソーサーヴァント・ルーラーとお見受けする」

月を背後にしてジャンヌを待ち受けていたのは黄金の鎧を纏ったソーヴァント。ジャンヌは一目でそのソーヴァントの真名を看破する。

「…赤のランサー。太陽神スーリヤの子、カルナですか」

「なるほど。それがルーラーの特権の一つか、ソーヴァントの真名を看破するスキルか」
「貴方は何故此処に？」

「既に理解していることを口に出すのは賢明とは言えんな。オレが此処にいること事態を明確な宣戦布告と捉えるがいい」

ジャンヌの問いに淡々と敵対の言葉を返すカルナ。

「今此処で私を害することに意味があるのですか？」

「知らない。お前を仕留めよとマスターに命令された、ならば契約上オレはそれに従うだけだ。お前の特権を考慮するに手加減する余裕はない一撃で終わらせる」

槍を構え戦闘態勢に入ったカルナに対しジャンヌも旗を構える。

ランサーが動き出そうとしたその時。

「やれセイバー！」

「!?？」

命令と同時に剣を持ったソーヴァントが赤のランサーに斬りかかる。

シロウ・コトミネは此度の聖杯大戦で聖堂教会より派遣された監督役兼赤のアサシンのマスターを務める神父である。その男は新たに七騎の召喚を確認した霊器盤を見て何度目かになるため息をついた。

「どうしたマスターよ？あまり不景気な顔を我に見せるでない」

そんなシロウに声を掛けたのは彼のサーヴァントである赤のアサシンである。

「すいません。このようなイレギュラーはさすがに想定してなかったもので」

「赤と黒の二つの陣営とは別に新たに七騎のサーヴァントの召喚とは確かに驚きよな。しかし、私の使い魔では未だ確認できておらん。壊れているのではなからうな？」

「それはないでしょう、古いですが信頼はできますよ。それでランサーの方はどうですか？」

「ルーラーとの接触には成功したが黒のセイバーの横槍が入った。ルーラーを仕留めるのは厳しいやもしれぬぞ」

ランサーの周囲を見張らせている使い魔から得られた情報と自分の考えを伝える。

「そうですか。……しばらく様子を見ましよう。それと黒のセイバーの真名を確認します、視界の共有をお願いします」

「全く便利なものよな。お主にかかれば真名の秘匿など意味をなさ

ん」

「こちらのセイバーのような例外もありますけどね」

真名を確認にするという本来あり得ない言葉にも平然と会話を続けるアサシン。シロウもアサシンに言葉を返しながら視界を共有し黒のセイバーを確認する。

「どうじゃ、読み取れたか？」

「ええ。黒のセイバーの真名はネーデルランドの遍歴騎士ジークフリートです」

「ほう。中々のサーヴァントを呼び出したものよな。ニーベルングの歌に名高い竜殺しか。セイバーとして呼ぶなら間違いなくトップクラスと言えよう」

「そうですね。しかし、それはこちらのランサーも同じです。それに互いに全力ではありません。さて、この戦闘につられて出てきてくれるとありがたいのですが」

赤のランサーならば黒のセイバーを相手にしても問題無いと判断し、まだ見ぬ第三陣営が介入してくれることを期待し微笑むシロウ。その目に不安の色は無い。

今いる世界や魔術について調べたりと自由に過ごしていたマスター達は夜になり夕食を終えた後、遠坂凜により地下に集められた。

集まったマスターとサーヴァントが目にしたのは地上で初となるサーヴァント同士の戦闘であった。

「これが本来の聖杯戦争ですか」

「別に月と変わらないだろ？サーヴァントを戦わせればいいんだから」

レオの呟きに気楽そうに応えたシンジ。

「お気楽ね、シンジ」

「別にそんなつもりは無いさ」

シンジの冷静な返しに少し驚いた様子の凜。

「意外ね。言い返してくると思っただわ」

「そんな無駄なことしないね。それに気楽なわけじゃないさ。僕はもう岸波あいつ以外に負け

るつもりは無いっただけだよ」

「本当に驚いた。人間変わるわね」

「全くだよ。少し見ない間にいい顔する様になったじゃないかシンジ！」

シンジの後ろで話を聞いていたライダーが凜に同意しながら会話に参加した。

「お前もちゃんとしろよライダー。僕が本気でやるんだ、負けなんて許さないからな」

「当然、アタシは勝つつもりでやってるよ。前回も今回もね」

かつての聖杯戦争で見たことのないシンジの真剣な表情にライダーも真剣に言葉を返した。

「シンジの覚悟はよくわかりました。皆さんも同じ思いでしょう。それでは目の前の戦いに戻りましょうか」

「そうですね。現在、私とミス遠坂の使い魔でその周辺に確認できているのはそこに映っている四人だけです」

「現在戦っているのは当然サーヴァントだな。残りの二人はマスターか？」

「敵同士のマスターが何もせずにいるとは思えませんな。それに男性の方は完全に隣の女性に対し無防備なように見えますが」

「ルーラーだな」

ダンの疑問に対し答えたのはランサーだ。

「あら、知ってるのランサー？」

「俺もそんなに詳しいわけじゃねえよ。ルーラーってのは聖杯戦争を正常に運営するために呼ばれるサーヴァントだってことぐらいだな」

「聖杯戦争の正常な運営ですか……。ガウエインは何か知っていますか？」

「サーヴァントに与えられる情報は皆同じものですので。しかし、ルーラーのサーヴァントには特権が与えられていると聞きます」

「特権ですか？」

「そこからは私が説明を引き継ごう」

突如として聞こえた声の方へ視線が集まる。そこにはいつからいたのか言峰が立っていた。

「アンタいつからそこにいたのよ？ 全く気付かなかったんですけど」

「気が抜けているのではないか遠坂凛。拠点にいるからといって油断してはマスターは務まらんぞ」

凛の疑問に対し笑みを浮かべながら言葉を返す言峰。

「彼女に落ち度は無いでしょう。ワシも全く気配を感じなかった」

「……気にするな。その神父は異常だ。月では監督役やら店員などという役割ロールについているが確実に戦闘能力がある。正直オレでは勝てないだろう」

「さて、どうか。機会があれば披露することもあるだろう。今は説明役としての仕事をこなすとしよう。簡単に言ってしまうえばルーラーとは聖杯戦争によって世界に歪みが出ると判断された際に聖杯から直接召喚されるマスターを持たぬサーヴァントだ」「つまりこの聖杯戦争に何か異常があると?」

「普通に僕らのことじゃないの? 月からの参加なんて確実に異常だろ」

「それはどうでしょう。確かに月からの参加はイレギュラーではありますが私達はマスターとして認められ、令呪も与えられています」

「皆さん。それはここで議論しても仕方ないことです。それより裏側にいた人達は気付いてますね?」

ルーラーの召喚理由については情報が足りないと判断したレオは話し合うべき議題をきりかえる。

「あのランサーか?」

「ええ。あれはカルナですね」

「月ではジナコ・カリギリのサーヴァントだったわね」

ランサーのサーヴァント・カルナ。その実力は間違いなくトップクラスのものでありマスターであったジナコにもう少しやる気と実力があつたなら聖杯戦争の勝者の候補にあがっていただろう。

「出来過ぎな気もするけど偶然？」

「月から送られて来たのは此処にいる者だけだ」

「この世界の聖杯戦争では触媒を用いることで狙った英雄を呼び出すことも出来ると思います。カルナ程の英雄であれば呼び出す者がいても不思議はありません」

「カルナ。月では戦う機会はありませんでしたが同じ太陽を背負う者として負けるつもりはありません」

「へえ、文句無しの大英雄じゃねえか。それとやりあつてるセイバーも大したもんだ。この戦い楽しめそうだな」

「なるほど。本物の『神槍』というわけか。面白い、是非死合うてみたいものだな」

ガウエイン、クローフォーリン、李書文セイバー、ランサー、アサシンといったサーヴァント達もカルナというビッグネーム

に闘志を燃やしている。

「気合い入れているところ申し訳ないですが今回は僕に任せて貰います」

「ちよつと、レオ何言つて!?？」

「貴方がお行きになるのですか？様子見ならばワシのアーチャーやユリウス殿のアサシンを行かせればよいのでは？」

「いやいや、確かに俺は偵察とかの方が得意ですけどね、せっかく本職がいるんだからアサシンの旦那に任せようぜ」

「偵察ならばオレとアサシンが出る」

「ダン卿、それに兄さんも申し出はありますが今からやるのは偵察ではありません」

「まさか普通に出て行く気なの？」

「勿論ですミス遠坂。隠密行動や暗殺を否定するつもりはありませんがそれは王が自分でやる事ではない。ボクは手の内を知られたとしても正面から全て叩き潰します」

「相変わらずなレオの言葉に周囲の者達は皆絶句したがその言葉からレオの王としての決意も感じとることができた。」

「と言っても今回は挨拶のようなものです。心配はいりませんよ」

「この場にいる全員、主に微妙な顔をしているユリウスに向けて無理をしなにとつける。」

「……はあ、わかった。だがアサシンはつけさせてもらうぞ」

「心配性ですね。では行きますよガウエイン」

「了解しました、我が王よ」

ガウエインを連れ添い出て行くレオの背からは月で敗北してなお確かな王としてのオーラがあった。しかし、それは月でいた時とは何処か違うと一部の者達は感じていた。

第四話 初戦（2）

戦場に出向くレオを見送った後、残された者達はしばらくの間誰も口を開かずモニターに目を向け戦い続けているセイバーとランサーを見ていた。

「…嬢ちゃんの時代にもいるもんだな。産まれながらの王つてやつが」

沈黙を破り口を開いたのはランサーだ。

「……それはレオのことを言ってるのよね」

「おう。月じゃちらつと見た程度だったが、今の立ち振る舞いは王のそれだな。太陽の騎士を従えるだけの器がありやがる」

「……」

「嬢ちゃんもわかってんだろ？ 今回の戦いはチーム戦だ。となれば全員をまとめる頭が必要だ」

「それをレオに任せろつて言うの？」

「俺はあの坊主が適任だと思うがな」

「……………」

凜はランサーの言葉に無言で応える。ランサーの言うことが正しいことは凜も理解

している。レオの素質は本物であり、実際月の裏側では一時的とはいえレオの下にいた事もあるため一応信頼もある。

「何勝手に話しをすすめてんだよ！」

ランサーと凜のやりとりに対し声をあげたのはシンジである。

「確かに月の裏側ではレオが仕切ってた。でも今回は状況が違うだろ！あの時の僕等はサーヴァントがいなかった。けど今は全員がサーヴァントを持つマスターだ！」

シンジの言う事はもつともな意見である。月の裏側ではサーヴァントを連れているマスターが少なく、レオはその中で純粋な実力なら間違いなく最強のマスターだった。ゆえにレオの下につくことにも抵抗は小さかった。

「坊主の言い分もわからない訳じゃねえが、セイバーのマスター以上の奴がいるのか？」

「それは…」

「悪いがお前さんには無理だ」

「なっ!??でも…」

「よしなシンジ」

「ライダー！」

「落ち着きな。リーダーなんて面倒なだけだよ。せつかくの派手な戦いなんだ下つ端の方が暴れられるってモンじゃないか」

ライダーに諫められ黙りこむシンジ。

「まあ、何にせよ先ずはあの坊主の戦いつてやつを見てみようじゃねえか。他の奴等もそれでいいか？」

ランサーは今までのやりとりを静観していたマスター達を見渡しながら確認をとる。

「もとよりオレはレオに従うつもりだ」

「わしも異存はない。人の上に立てる器ではないのでな」

「私も異論はありません」

「私もレオさんならば心配はないと思っておりますよ」

ユリウス、ダン、ラニ、キアラの4人は特に考える様子も無くランサーの問いに答えた。あまりにも早い回答に凜は呆れ、シンジは何か言いたげではあったが口を開くことはなかった。

ランサーも4人の即答には少々驚きながらも、決まりだな。とモニターに映る戦闘に目を戻した。

—————

ルーラー排除を命令された赤のランサーとそれを阻止するために現れた黒のセイ

バーの戦闘は聖杯大戦における最初の英霊同士の戦いとして相応しいものだろう。

セイバーとランサー、三騎士クラスの中でも近接戦闘に優れた2騎による戦いは魔術には頼らない純粹な力の衝突である。当然、それは見るものを圧倒させた。

ルーラーの横にいる黒のセイバーのマスター、ゴールド・ムジーク・ユグドミレニアを始めとする聖杯戦争の経験者であるダーニックを除いた黒のマスター達は自らが使役するサーヴァントの力を再認識している。

そして戦っている当人達も僅かな驚きと強敵との出会いに喜びを感じていた。

(戦いでダメージを受けたのはいつ以来だろう)

アーモアオブファヴニール

悪竜の血鎧黒のセイバー、ジークフリートの宝具はその体そのものである。ニーベルンゲンの歌にて悪竜ファヴニールを討ち果たしたさいに浴びた竜の血により得た不死身の肉体。それ以降戦場において彼の身に傷をつけれる者はいなかった。

その体を赤のランサーは槍の一突きで削りとる。それ自体はかすり傷のようなものであり、マスターであるゴールドによりすぐに治療されるため問題ない。

「はあー」

赤のランサーの鋭い突きを受けながらも多少の傷は無視して剣を振り下ろす。

真名解放していないとはいえ宝具での斬撃を赤のランサーの纏う黄金の鎧は受け止める。ダメージが通っている感覚はあるが決定打を決めるにはおそらく生身の部分を

狙う必要がある。だが黒のセイバーはこれまでの打ち合いから技量において赤のランサーに劣ることを理解していた。

しかし、彼の目には悲観の色は無い。目の前に立ちはだかる壁に屈するようでは英雄は名乗れないのだから。

対する赤のランサーも初戦で黒のセイバーという強敵と立ち会えたことに戦士として喜びを感じていた。彼が生涯にわたって磨き上げた槍は素早く的確に相手を貫く。並のサーヴァントであればすぐにでも決着が着くだろう。

実際、この戦闘においても早々にランサーの槍撃がセイバーを襲い、そのどれもが致命傷になりえる一撃だった。だが黒のセイバーは倒れない。傷はどれも浅く戦闘に支障の出るほどのものではない。

（ありえない。いや、ありえないからこそその英雄か）

目の前に立つセイバーが紛れも無い英雄であることを再確認する。果てに自分を討った英雄に似た目をしたこの男は間違い無く自分を打倒しえる存在であるとランサーは確信した。

たとえこの身が黄金の鎧を纏っていようと関係は無い、少しでも隙を作れば押し切られる、そんな予感がランサーにはあった。

(ならばこそ簡単に討たれる訳にはいかんな)

赤のランサーの槍撃はより苛烈さを増す。目の前の英雄にこたえるために、自分の力を求めて召喚したマスターの為に。

一進一退の攻防を続ける黒のセイバーと赤のランサー。黒のセイバーのマスター、ゴルドは自信を持って召喚したジークフリートが傷をおっている事に動揺しながらも回復魔術に専念している。

それを横目に確認しながら二騎の戦闘を観戦していたルーラーは自分の索敵範囲内に一騎のサーヴァントが入ったのを確認した。

(これは……真っ直ぐにこちらに向かってくるね。おそらくは新たに召喚されたサーヴァントの内の一騎。このタイミングで仕掛けてきますか)

ルーラーとしては一刻も早くイレギュラーに現れた七騎とそのマスター達に接触し話を聞かねばならない為向こうから来てくれるならば都合が良い。しかし、現状は二騎のサーヴァントが戦っている最中である。

(セイバーとランサーは共にこの場で全力を出す気はない様子。ならばこの場を離れて先ずは私が単独であちらに接触すべきでしょうか)

ルーラーが今後の方針を決めかねている中セイバーとランサーも接近してくる気配

に気づいていた。

「セイバー、気付いているな？」

「……」

ランサーの問いに無言で頷くセイバー。

そして互いに距離をとり構えをといた。

「おいセイバー何をしている！」

ゴルドが突然戦闘を止めたセイバーに対し声を上げる。隣にいたルーラーもその声を聞き意識を目の前に戻す。

「その様子ではお前も気付いているようだなルーラー」

「ええ。私にはルーラーの能力としてサーヴァントを感知する力がありますので。私よりも貴方達が気付いているのに驚きなのですが。まだ距離がありますよ」

「なるほど。ルーラーとは便利なものだな。確かにオレ達には離れた位置にいるサーヴァントの感知はできない。だが流石にこの気配に気付けぬほどではない」

「この気配？」

ルーラーは赤のランサーの言葉に首をひねる。

「先程からなんの話をしている！」

全く状況が読めていないゴルドは声を荒げている。

「セイバー！どうなっている？」

「……いいのか？」

黒のセイバーはマスターであるゴールドから口を開くことを禁じられているため問いかけてくるゴールドに対し確認をとる。

「くっ…。構わん状況を説明しろ」

「了解した。どうやらこの場にサーヴァントが接近している」

「なんだと!?？ 本当なのだろうか？」

「間違いない。そうだなルーラー」

「その通りです。ところで黒のセイバー、貴方はどうして気付いたのですか？」

先程聞いたランサーからは明確な答えが得られなかった為にセイバーに問うことにしたようだ。

「それは此処に向かっている者が気配を隠す気が無いからだ。むしろ今から行くから待っていると言うように自らの存在を示している。戦いの中に身を置く者ならば無視出来ない気配だ」

「そういうことでしたか」

「無駄話しをしている場合か！私は増援の連絡など聞いていない！ならば来るのは赤の増援だ。貴様が早々にランサーを討てぬからだぞセイバー！」

「それは違うぞ、セイバーのマスターよ。此処に向かっているのはオレの陣営の者ではない」

「何を馬鹿なことを言っている！赤のサーヴァント以外あり得ない！」

「いいえ。赤のランサーの言っている事は本当でしょう」

「何だと」

「その様子では何か知ってるのか？」

「私は……」

状況を説明しようとしたルーラーの言葉はすぐに遮られた。

「どうやら来たようだ」

「なっ!?」

赤のランサーは自然体で立ったままだ、黒のセイバーはマスターを守るために前に立ち油断なく身構える、話しに集中していたルーラーは少し気付くのが遅れたようだ。

そして彼等の前に現れたのは白銀の鎧を纏いし騎士と騎士に腕に抱えられた少年。

「レオ、到着しました」

「ありがとうございます」

戦場に来たとは思えない優雅な動きで騎士の腕から降り礼を言う少年と僅かに頭を下げた後に少年の後ろに控える騎士。

「さて先ずは挨拶からですね。はじめまして、ボクはレオ・B・ハーウェイ。この度は赤と黒の陣営に続く第三陣営・月の陣営としてこの聖杯大戦への参戦を表明します」

レオの言った言葉はその場にいた者達に大小はあれど驚きを与えた。

「……月の陣営だと？ふざけるな！そんな物が認められるものか！そもそもサーヴァントの追加召喚などありえん！貴様、赤の陣営のマスターであろう？攪乱のつもりか！」
「なるほど、そう思いますか。しかし、ボク等は赤のマスターではありません。そちらの女性、ルーラーとお見受けしますが貴女はどうですか？ボクの中には驚いた様子がないようですし、知っていたのでは？」

ゴルドからの言葉などものともせずレオはルーラーに問いをなげる。

「それは……」

「ルーラー？」

「確かに私は貴方がたの存在に気付いていました。いえ、正確には新たなサーヴァント7騎の現界を聖杯より知らされました。それに合わせて新たに7騎分の令呪が私に与えられました」

「なっ!?？」

聖杯からルーラーに対しサーヴァント召喚の知らせがいき令呪すら補充された。それはつまり聖杯がレオと名のつた少年を含めた新たなマスターの参戦を認めたという

事である。

「馬鹿な……そんな事が……」

思わぬ事態にゴールドは呆然と呟いている。

「納得して頂けましたか？」

「ルーラーとしては聖杯が認めたならば認めるしかありません。しかし、貴方達の目的は何なのですか？」

「目的ですか……。特にありませんね、僕等も放り込まれたようなものですから」「放り込まれた？」

「そのあたりはお気になさらず、やるからには勝たせてもらいますので」

「そうですか、ならば貴方達の参戦を認めましょう。ただし不穏な動きをすれば相応のペナルティが与えられます」

「それは全ての参加者に言えることでしょう」

ルーラーはレオからの言葉に頷き、謎はあるがイレギュラーな参加者が話の分かる相手であることに安心していた。

「ルーラー！それで良いのですか？！第三陣営など認めていいはずがない！今すぐに貴女の特権で始末するべきです！」

一先ず自身を落ち着けたゴールドがルーラーに申し立てる。

「それはできません。彼等は既に聖杯に認められたマスターです。何のルール違反もなく私が特権を使う事はありません」

「くっ！セイバー、今すぐ奴らを始末しろ！」

「!? マスター、それは……」

「黙れセイバー！お前は私の指示に従っている」

「……」

黒のセイバーはマスターの言葉に黙りこみ、赤のランサーに対し目線を向けた。

「お前があちらに行くというなら邪魔はしない。こちらは一先ず静観しろと指示があったのでな」

「すまない」

赤のランサーに一言を残して黒のセイバーはレオ達に対し動き出した。それを見てすぐにレオの後ろに控えていた騎士が前にでて剣を構える。

「今回は挨拶だけのつもりでしたが仕方ありません。迎えうちなさいガウエイン」

「はっ」

一氣に間合いを詰めるため踏み込もうとした黒のセイバーを始め、他の者達もレオの言葉に驚きに目を見開いた。

彼は自分のサーヴァントである騎士に対し命じた際にクラス名ではなくガウエイン

と呼んだのだ。

（嘘ではなく本当に真名を明かすなんて!?!?）

その中でも真名看破のスキルを持つルーラーはそれが真実であることに気付いた。

黒のセイバーはすぐに気を引き締め直しガウエインと呼ばれた騎士に対し斬りかかる。

だが瞬間、鋭い殺気が黒のセイバーを貫いた。

「っ!?!?」

黒のセイバーは本能に従い急停止して身を捻りながら出来る限り後ろに飛んだ。それと同時に腹部に衝撃が走った。

「セイバー何をしている!」

黒のセイバーの身に起きた事が理解出来ないゴールドが怒鳴る。

「先程からお主のマスターはよく怒鳴る奴よな」

何もない空間から声が出た。黒のセイバーは直ぐに気配を探したが声を出したにもかかわらず全く気配が掴めない事に驚愕する。

「……何者だ?」

「儂か? 儂はそうじゃの……」

「アサシン、王の命じた戦いに手を出すとはどういうつもりですか?」

黒のセイバーの問いに答えようとした見えない何者かの発言を遮るようにガウエインが声を上げる。

「そう怒るでない、セイバー。あれ程の戦いを見た後じや、儂も血が騒ぐというものだ。それに素奴もそれほど乗り気ではあるまい」

「レオ、よろしいのですか?」

「別に構いませんよ。出し惜しむつもりはありませんが先程も言ったように今回は挨拶ですから」

「呵々、良い良い。融通の利く上司は好ましいぞ。それにしても、黒のセイバーよ、先の戦いから分かつてはおつたがやはり硬いの。咄嗟に身を引かれたとはいえ確かに捉えたはずだが、儂の拳を受けて無傷とはな」

それもまた面白いと笑うアサシンの姿は見えずやはり気配すら感じられない。そんなアサシンの無言で警戒する黒のセイバーは内心で先程の攻撃について考えていた。

(あれが拳による殴打だと……)

確かにアサシンによる攻撃によって大きなダメージはおつてはいない、だがその攻撃はとても拳による物とは思えない衝撃であった。もしも、先の一撃が自分以外の黒のサーヴァントであれば勝負が決まっていたのではないかと思わせるには十分であった。

(攻撃してなお気配を悟らせない程の気配遮断のスキルは驚異だ)

結論を出したセイバーはマスターであるゴールドを守るため後退する。

「どうしたセイバー!? 何故戻ってくるのだ!」

「……敵のアサシンだ。気配を感じる事が出来ない」

「アサシンだと!」

黒の陣営には未だアサシンが合流していないためアサシンの驚異がどれほどのものを理解しきれていなかった。

（気配などまるでないではないか）

セイバーですら感じられない気配をゴールドにわかるはずもなく。それが恐怖に変わるのに時間はかからなかった。

「て、撤退だセイバー! 私を守れすぐにこの場を離れる!」

「……了解だ、マスター」

「去るか黒のセイバー」

「……赤のランサー、願わくば次こそは貴公と決着をつけるまで戦いたいものだ」

「そうか。オレも初戦にお前と打ち合えた幸運に感謝しよう」

「敵との会話を許した覚えはないぞ! ルーラー良ければ我らと一緒に来ては頂けませんか?」

「それは公平性に欠けます。それにこの場にはまだサーヴァントが残っています。貴方

達が引くのを止めはしません。私が私はこの場に留まります」

「くっ。行くぞセイバー！」

こうして黒のセイバーはマスターと共に撤退した。

「さてあなたの方々にはまだ聴きたい事がありますが、赤のランサー、貴方はどうされるのですか？」

「オレもあちらに用がある。出来るだけ情報を集めるとの指示だ」

「ボクの目的は済んだのですが。やる気ですか？赤のランサー、いえ『施しの英雄』カルナ」

ルーラーと赤のランサーの会話にレオが割り込む。

「ほう？オレの真名を容易く見抜くか。いやその様子では最初から知っていたようだな」

「サーヴァントの真名まで知っているなんて……貴方達は本当に何者ですか？」

「いえいえ、カルナには以前お会いした事があるんですよ。流石に全てのサーヴァントを知っているわけではありません」

「別の聖杯戦争に参加したことがあると？」

「まあ、そんなところです」

「それでお前達はどうする気だ、戦うというのであれば相手をしよう」

「望むところですよ」

カルナの言葉にガウエインが応えて前にでる。

「円卓に名高き太陽の騎士か。しかしこの月夜では伝説にある太陽の加護も受けられない」

「関係はありません。主が命じれば剣となり勝利を捧げるのが私の役目です」

「なるほど、その濁りなき忠誠は見事だ。ならば此方も我が槍を持って応えよう」

「アサシン。手は出さないで頂きたい」

「よからう。こたびはお主の剣を見せて貰うとしよう」

「では……参ります」

動いたのは同時、互いに一步の踏み込みで距離を詰め剣と槍がぶつかり合う。そこからの戦いは先のカルナと黒のセイバーの戦闘に劣る事のない剣撃のぶつかり合い。

ガウエインはカルナの神速の突きを的確にそらし、僅かな間を狙い剣を振り下ろす。カルナも槍をすぐさま引き戻し水平に構え力強い一振りを受け止める。

振り下ろし、突き、払いを駆使し互いの攻撃をしのぎ続けている。

「よくも捌く、流石だな太陽の騎士」

「貴方も見事な槍術ですよ」

「やはりオレは運が良い。一夜にして二人もの得難い好敵手と出会えるとはな」

一度距離を取り二人が口にしたのは賞賛の言葉。互いに再び動き出そうと構え直す。「そこまでです!」

声の主はガウエインのマスターであるレオ。

「ガウエイン下がりなさい。カルナ、そちらも今日のところは引きませんか?」

「む、良いのか?あのランサーは紛れも無い強敵であるぞ」

相変わらず姿の見えないアサシンが問いかける。

「何度も言いますがボクの目的は参戦の挨拶です。それに戦いはまだ序盤、カルナも全力を出す気はないようですし情報収集がメインの戦闘に付き合う気は有りません。ボクが動く以上我らに与えられるのは必勝のみですので」

「レオが引けと言うなら私は従います」

「そうか、ならばこちらも引こう。元より適当な所で戻れと指示されているのは事実だ。ではさらばだ太陽の騎士とそのマスター、そして姿無きアサシンよ」

カルナは潔く引き下がりがその身を霊体化させこの場より去っていった。

「ではボク達も戻らせて貰います。ルーラーは聴きたいことがあるならば付いてきますか?」

（確かに彼等の情報は必要です。しかし今の私はレティシアの体を使って現界している身。無理はできませんか）

ルーラーはレオからの問いにしばし考えるが首を横に振った。

「いえ。必要があればこちらから出向きます。謎は多いですが一先ずは貴方達を信じましょう」

「そうですか、分かりました。それでは戻りますよガウエイン」

こうして第三陣営の参戦というイレギュラーが発生しながらも初戦は幕を閉じた。

第五話 初戦考察

「とりあえずは予定通りというところですかね」

アサシンの使い魔を通じ初戦を見終えたシロウ・コトミネは、誰に聞かせるでもなく呟いた。

「まさか本当に出て来るとは。半ば予想していたとはいえ第3陣営の参戦は厄介よな」

突然現れたアサシンが背後からシロウの独り言に応えた。

「……アサシン、心臓に悪いので気配遮断で近づかないでほしいのですが」

シロウは少し抗議しながらアサシンの方へ振り向く。

「我のマスターとなった以上慣れるしかないの」

「それは困りましたね」

アサシンの言葉に笑いながら応え、シロウは作業を始める。

「何をしておるのだ？」

「獅子劫さんに情報をお伝えしておこうと思ひまして」

「あ奴らか。良いのか？」

「情報の共有は大切ですよ。単独行動とはいえ今はまだ赤の陣営の一員ですからね」
「では援護の一つでもを送るか？ 最優のクラスを従えているとはいえ、この状況での単独行動は厳しかろう」

「いえ。それは共闘を断つた彼に失礼でしょう。」

それに敵が増えた今、これ以上戦力の分散は避けたいので」

「ならば精々かき乱して、『黒』と『月』の両陣営の情報を引き出してくれるといいの」
「ですね。それでアサシン、あなたの宝具の完成具合はどうですか？」

「材料の方は問題ない。あと数日といったところよな」

「そうですね、では準備が完了次第トウリフアスに攻め入ります」

「まずは聖杯の確保が優先か？」

「ええ。ないとは思いますが、前回のように入聖杯を持ち逃げされても困りますので早めに確保しておきましょう」

2人が今後の目標を定めたところで、部屋の扉がノックされた後開かれた。

「キャスターですか、どうかしましたか？」

「おおマスター、それにアサシン殿もご機嫌麗しゅう」

扉から入ってきた男は芝居掛かった口調で挨拶する。

「挨拶はよい、我らは要件を聞いておる」

「一つご報告したいことがございまして」

「さつさと言え」

もつたいぶるキャスターに少しイラついた様子でアサシンが先を促す。

「バーサーカーがトウリファスに向けて進軍を開始しました」

「何?！」

キャスターの報告に声を荒げるアサシン。

「どうやら倒すべき相手を見定めたようで」

「はあ、唆したのはあなたですねキャスター」

「唆したとは人聞きの悪い。吾輩は世間話として、串刺し公と名高いヴラド三世の話を
しただけですとも」

「お主という男は……」

「……仕方ありませんね。一先ずはアーチャーとライダーに追わせましょう。出来れば
引かせたいところですが、深追いはしないよう伝えてください」

「致し方無しか」

「ええ。あのバーサーカーは止まりません。私はバーサーカーの通る道への対処に動き
ますので、しばらく動けません。これでも教会から派遣された監督役ですからね」

「よく言うの」

「それでこそ我等がマスターですぞ」

シロウは獅子却以外の赤の陣営のマスターをアサシンの力で操り、実質赤の陣営を支配している。さらには聖杯戦争において中立であるルーラーの殺害指示までだした。

そんな男が今更、監督役を名乗るのはおかしな話だ。しかし、そんな男だからこそ二騎のサーヴァントはシロウ・コトミネをマスターとして認めている。

「さて、忙しくなりますね」

吐いた言葉とは裏腹にその顔は晴れやかだ。予想外のイレギュラーは発生したが、この戦いはシロウが待ち望んだものだ。

「聖杯戦争の始まりです。私の、いや俺の願いを叶えるための」

小さく呟いた言葉には力があつた。たとえこの戦いで何があろうとも、叶えるべき願いを持つシロウの覚悟が揺らぐことはないだろう。

—————

ルーマニア・トランシルヴァニア地方に位置する都市・トウリファス。中世の雰囲気を残したその街に、ユグドミレニア一族が本拠地とするミレニア城塞が存在する。数多くのトラップとホームンクルス、ゴーレムに守られたその城には、ルーマニアに伝わる

偉大な王が王座に腰掛けています。『串刺し公』ヴラド三世。ユグドミレニアの長、ダーニック・プレストーン・ユグドミレニアのサーヴァントであり、黒の陣営の王でもある。現在、彼を中心にユグドミレニアのマスターとサーヴァントが集まっている。

「ダーニック、奴らは一体何者だ？」

問われたダーニックはヴラド三世に対して答えることができない。むしろダーニック自身が最も混乱していると言つてもいい。

「……あらゆる方面から調べましたが、レオ・ハーウェイと名乗ったマスターについては、このルーミアへの入国記録どころか一切の情報が出てきませんでした。まるで突然現れたかのようなです」

「そうか。だが実際にサーヴァントを連れており、ルーラー、すなわち聖杯も月の陣営とやらの参戦を認めているということか」

「……そうなります」

「ふむ。大賢者よ、君はどう考える？」

大賢者、そう呼ばれたのはフィオレ・フォルベエッジ・ユグドミレニアのサーヴァント・黒のアーチャーである。その真名はギリシャ神話に名高い英雄達の師をつとめ、サジタリウス射手座の原型でもある弓兵ケイローンである。

ケイローンは咳払いしたあと口を開いた。

「まだ情報が少な過ぎますが、こちらがどういった対応をとるかを考える必要があります。まず最悪のシナリオは、赤と月の二つの陣営に手を組まれることですな」
「確かに14騎ものサーヴァントを相手にするような事になれば、私達の敗北は必須となります」

彼のマスターであるフィオレがその状況を想像したのか硬い表情で応えた。

「ええ。いくらこのルーマニアにおいて最高の知名度を誇るランサーがいれども、数と
いうのは単純な脅威です。現在確認している赤のセイバー、赤のランサー、月のセイ
バー、そして姿は確認できていませんが月のアサシン、どれも強力なサーヴァントです」
最悪の事態の想定に沈黙がおりる。そんな中でこの場に似合わない明るい声が沈黙
を破る。

「ねえ、セイバー？月のマスターくんは自分のサーヴァントの事をガウエインって呼ん
だんだよね？」

黒のライダー、アストルフオ。セレニケ・アイスコル・ユグドミレニアが呼び出した
サーヴァント。シャルルマーニュ十二勇士の一人に名を連ねる英雄である。

「あんなものはハツタリに決まっている！自らのサーヴァントの名を明かすなどありえ
ん！」

ライダーの問いにゴールドが怒鳴りながら割り込んだ。

「ボクはセイバーに聞いたんだけどな」

「セイバーには口を開く権利は与えていない！」

「戦闘の時は普通に話してたじゃないか？」

「……あれは非常時だったからだ」

「もうよしなさいライダー」

「はい」

セレニケに止められたことで引き下がるライダーをゴルドは睨みつけている。

「本当に嘘だと思えますか？」

「自分のサーヴァントの真名は隠すものだと言っている。ギリシャの大賢者ともあろう者がわからんのか？」

「確かに真名は隠すもの。しかし、決めつけるのは早計かと。とはいえ情報不足のことでこれ以上議論するのは生産的ではありませんね」

その場は引いたケイローンだが、レオと名乗った少年が言ったことは真実だろうと半ば確信していた。多くの英雄やその卵を見て来たからこそその観察眼は、映像越しの姿からさえ少年の本質に迫っていた。

「それでは今後についての話に戻ります。一先ず月の陣営に関しては置いておきましよう。当然、放置するわけではありません。使い魔により探索はします。しかし、発見し

でもこちらから仕掛けることはしません」

「あくまでも赤の陣営に集中すべきだと申すか?」

黒のランサーの問いに領き、さらに言葉を続ける。

「ええ。いまだ目的がはつきりしない月の陣営に対し、こちらから仕掛けるのは愚策になる可能性が大きい。まずは当初の予定どおり、赤の陣営を優先的に叩くべきかと」

「王よ、引き続きこちらでも調査は続けます。今はアーチャーの進言通り、まずは御身の領土に踏みいる魔術協会の者共を滅ぼすべきかと」

「……よかろう。いずれにせよ余の領土に踏みこむ蛮族には、死をもって償わせねばならぬ」

「話の途中だがかまわなかな?」

今まで無言を貫いていた黒のキャスター・アヴィケブロンが口を開いた。

「何か策でもあるのかね、キャスター?」

「いいや、そうではない。警戒用に放っているゴーレムに反応があった。かなりのスピードでこちらに向かうサーヴァントを感知した」

「なんだと」

「こちらでも確認しました」

ダーニツクの言葉が終わると同時に、トウリファスに向けて突き進む大男の姿が映し

だされた。

次なる戦いの幕が上がる。